

最も刺激的な本を生み出す、話題の3組。

紙というメディアを縦横無尽に美的センスで埋め尽くし、いま最も私たちを刺激する気鋭の3組。それぞれのこだわりと、デザイン哲学をとくとご覧あれ。

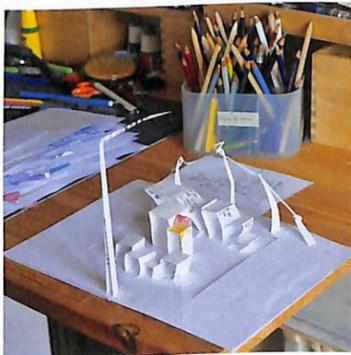


アヌーク・ボワロベル&ルイ・リゴー (パリ) 新世代ポップアップは、大人も魅了する。



Anouk Boisrobert & Louis Rigaud

●アヌーク(左)は1985年フランス南西部ボー生まれ。ルイは85年パリ生まれ。ともにストラスブールの芸術美術大学で教育美術を学び、2009年に卒業。http://anoukboisrobert.fr http://ludocube.fr



学生時代のワークショップで製作した「POPVILLE」の初期試作。思い出深い、ポップアップ処女作だ。



2人のポップアップは、アヌークとルイのデザインと見本製作から生まれる。鮮やかな色の製作が作業台に置かれて。

縦長の細長い表紙に、真っ赤なタイトル文字。扉を開くと、赤い屋根に鐘楼を掲げた教会が現れる。小さな村は、ページをめくるごとに新しい家が増え、工事車両やクレーン車が現れて、駅舎やビルが建ちあがり、ついには鉄道や車の行き交う都会へと成長していく。積み木を思わせる赤、青、黄色の原色使いと、キューブや三角形のグラフィカルなイラスト。時を経て拡大していく町の姿を言葉もなく描いたポップアップ絵本『POPVILLE』(28ページ)は、子どもの想像力だけではなく、大人の美意識をもくすぐる逸品だ。

デザイン上のアイデアが、新しい本を生み出す。

この本の生みの親は、アヌーク・ボワロベルとルイ・リゴー、29歳の若きカップルだ。ストラスブールの芸術美術大学でともに教育美術を学んだ2人は、学生時代のワークショップでポップアップに出合った。

「この授業でアヌークと組んで製作したのは『POPVILLE』の原型」と言うのはルイ。「アイデアの基本は大小のキューブのグラフィック。これを家に

beautiful BOOKS



見立てて町を描く。また、ページの中央に穴を開けることを思いついた。穴の中に前ページの建物が残るから、穴をしだいに大きくすれば、ページを繰るごとに、既存の村に新しい建物が加わっていくんだ」

新進児童書出版社の目にとまった課題作品が本の形になったのは、2009年、2人が卒業証書を手にした年。「見開きが正方形になるように判型を縦長にしたの。タイトルも考えて、装丁も2人で一緒につくり上げたのよ」とアヌークは言う。ただし、巻末に添えられた文章は、作家の手で最後に加えられたものだ。

「この本は、デザインの習作から出発したキューブの遊び。だから、シンプルでグラフィック的に仕上げた。私たちが表現したのは町が大きくなっていく、というニュートラルな記録にすぎません」と言うのはアヌーク。「巻末の文章は、作家が僕らの作品から感じ取ってくれたひとつの解釈。物語は本を手にとった人が、それぞれにつくればいい」とルイは語る。

『OCÉANO』
アヌーク・ボワロベル / ルイ・リゴー 絵・文
hélium éditions
2013年

2人の最新ポップアップ。ページを開くとダイナミックに立ち上がる紙面を海面に見立て、海上と海底を描き分けたアイデアが斬新。世界を旅する船を主人公にした物語。ディテール豊かなイラストにも注目を。



本のもつインタラクティブな可能性を、追求したい。



[dans la forêt du paresseux]
 アヌーク・ボワロベール／
 ルイ・リゴ 絵
 ファビエンヌ・ボワナル 文
 hélicon éditions
 2011年
 コンビ2作目は消えゆく森がテーマ。見開き中央の穴がしだいに小さくなり、森が消えていく仕掛け。木にぶら下がるナマケモノが、自然破壊に気づかぬ人間を象徴。再び種がまかれ、森が再生する結末にひと安心。



[POPVILLE]
 アヌーク・ボワロベール／
 ルイ・リゴ 絵
 ジョイ・ソルマン 文
 hélicon éditions
 2009年
 真ん中に生まれた小さな教会から、しだいに町が拡大していくさまを描いた言葉のない物語。電線に糸を使っているのもポイント。2009年「最も美しいフランスの本」コンクールに入賞。

アヌークはおもに児童書やメディアへのイラスト、ルイはマルチメディアをフィールドとするグラフィック・デザイナー。それぞれの分野で活動する2人だが、これまで世に出た5冊の本は、いずれも二人三脚でつくり上げた。2人でアイデアを探し、ともに習作を繰り返す。方向性が決まると、アヌークがイラストを描き、立体構成やページづくりはルイが担当。そんな2人にとって本づくりの出発点は物語ではない。グラフィックやビジュアル表現のアイデア探しこそが原動力だ。

彼らの2作目の「dans la forêt du paresseux」は「POPVILLE」で見つけた、中央に穴を開けるアイデアを逆転。ページを繰るごとに穴は小さくなり、大きな森の木々が減っていく。3作目の「Océano」では、ページを開くと立ち上がる紙を海面に見立てることから、本づくりが始まった。海を歩く船の冒険と海底の様子を描き、謎解きふうの文章を2人で添えた。

ポップアップ作家のレッテルを貼られるのが嫌で、「実は2作目でやめようと思った」と言うが、現在も新アイデアをもとに新作を準備中だ。

本という世界に、新しい風をもたらしたい。

ポップアップ以外にも、彼らのイマジネーションは広がっていく。その一例が、切り絵によるアコーディオン式の「Liberté」。フランス人なら誰もが学校で習う有名な詩を「2人の自由な

アイデアで本に」という、大手出版社の依頼から生まれた本だ。

有名な詩だから威圧感のない軽いデザインを、と考え、切り絵を取り入れた。木々や山並み、船を描いた小さなモチーフがページを追うことに重なり、やがて一幅の風景になる。本を立ててページを手前に引けば、風景は3次元に。ポップアップとはまた異なる、軽やかに静謐な立体表現が美しい。物心ついた頃からコンピューターが身近に存在する世代。電子書籍が本の位置づけを脅かそうといういま、彼らは書籍をどうとらえているのか。

「興味があるのは児童書。文章と絵の関係、本の形や紙の選び方など、創造性を働かせることができる、豊かな分野。ポップアップは、読み手が本というオブジェを手にとって操れるのがいい」とアヌーク。一方ルイは、「もともと何かを探したり、つくったりするゲームブックが好き。本の世界に、これまでなかった新しい何かをもたらしたい。本のもつインタラクティブな可能性に興味がある」と言う。

最新作は、インタラクティブ絵本「lip.tap」。コンピューターに付属のCDを挿入し、絵本の単語をコンピューターに入力、ディスプレイ上で言葉遊びができる仕掛けだ。本が発信する一方通行の伝達ではなく、読み手も関わられる本づくりを、というルイのアイデアから生まれたものだ。

「本とコンピューター、ふたつのオブジェの間に橋をかけた」と言うルイ。「次のポップアップは、タブレットに絡めていきたい」とアヌーク。若きカップルが描く新世代のビジュアル本。今後の進化が楽しみだ。



[Liberté]
 アヌーク・ボワロベール／
 ルイ・リゴ 絵
 ポール・エリュアール 詩
 Flammarion
 2012年
 フランス人なら誰もが学校で習う「レジスタンス」をテーマにした詩「リベルテ(自由)」が仕掛け絵本に。表紙の小さな丸い穴は月。山や木々、人物を切り絵にし、ページを繰ることで重なってゆく風景を描いた美しき1冊。

